

文芸作家として 数々の作品を発表し 地元教師や文学青年と交流する

早稲田大学を卒業後

作家として執筆活動に入る

若くして詩歌を学び、中央で文学活動が続いていた水野葉舟は、大正13年2月、遠山村駒井野(成田市)の開墾地に「藁の穴」と呼ぶ小屋のような家をつくって移り住んだ。

駒井野を愛し、この地に住み続けた葉舟は、亡くなる昭和22年までの20年余に及ぶ作家生活を通じ、この地方の文学の進展に大きな足跡を残した。

水野葉舟は明治16年(一八八三)4月9日、東京下谷区仲御徒町(現台東区上野)に、父勝興、母実枝の長男として生まれた。本名は益太郎、別号を蝶郎と号した。文学への目覚めは、父の任地の福岡県立豊津中学に入學、級友と教室新聞を発行した13歳のころに始まる。その後、旧制五高の受験準備時代、葉舟の名で投稿した詩「長夜吟」



水野葉舟(みずの よしゆづ)

東京都台東区に生まれる。「新詩社」に入り、「明星」同人となり詩歌に励む。大正13年、駒井野に「藁の穴」と呼ばれる小屋をつくり移り住む。土地の文学好きな青年たちと「七葉会」を結成し交流する。文学界で活躍。

が初めて「文庫」に掲載された。このことが文学を志すきっかけともなった。以来、詩作に没頭して入試に失敗。その後上京して江原素六や与謝野鉄幹の門をたたき、作詩、作家の指導を受けるようになった。

明治38年早稲田大学政経科を卒業。23歳ころから「文庫」や「新声」などに作品を投稿した。

その後、東京新詩社に入り、「明星」同人となり、蝶郎の別号で、詩一編、短歌15首を発表するなど、新鋭作家としての才能を発揮していった。

短編集を 次々に発刊

明治39年7月、最初の小品文集『あらさき』を出版。同月、窪田空穂との共著歌集『明暗』を出版した。この小品文は緻密な、そして鋭いタッチと、ソフトな筆調をととのえた優雅な短章と好評を得た。

明治41年2月、長男弘が誕生。『響き』(明治41年刊)、『森』(同45年刊)など印象的な小品集を発刊。このころ



三里塚記念公園に立つ葉舟の歌碑

から小説を書いたが、本格的な小説は第二短編集『微温』(同42年刊)といわれ、第三短編集『壁面』は風俗暴乱の理由で発禁を受けた。そのほか発禁を受けた作品には、『おみよ』(同41年刊)があった。新しい時代の若い女性のテリケートな感情を素直にとらえた佳作との評もされていたが、発禁は新進作家にはつきものの時代の風当たりでもあった。選集には高村光太郎選の小品文集『草と人』(大正4年刊)がある。大正七年、高村光太郎と二人雑誌『智恵』を発行。大正4年6月難産のため急逝した愛妻智恵子の死をうたった詩集『凝視』を発刊した。

大正12年9月関東大震災直後、葉舟41歳のとき、画家伊藤直臣の妹、文と結婚し、のちに、本郷区駒込蓬萊町(現文京区)に移り住んだ。

翌13年2月、印旛郡遠山村駒井野小字大水野(現成田市内)にある開墾小屋にひとり移り住み、この小屋を「藁



文学が好きで集まった「七葉会」のメンバー(前列左から2人目が葉舟)

の穴」と名付けた。

葉舟は下蛇窪時代からひそかに傾倒していたトルストイや高村光太郎の思想の影響を受け、わずらわしい都会の生活を逃れ、下総の広野に入り、野営に近い生活に入り、自然に直面した自己の生き方を求めようとしたのであった。そしてここに原野に生きるたくましい、そして厳しい生活を開始した。

大正14年2月、葉舟43歳のとき、次男清(後、衆議院議員、建設大臣にもなる)誕生。中学時代の級友飯尾文次郎の斡旋で、南満州鉄道株式会社に招待され、その初冬、南満州、朝鮮に旅

行した。大連の埠頭に上った時の次のような歌がある。

唇にふるるは遠きシベリアの

冬はしまるアジアの陸は凍りそめ
 人は毛皮に身をくるみそめ

大正15年10月、父勝興が逝去し、追うように母実枝が昭和2年4月逝去した。

昭和3年9月、葉舟は「藁の穴」と呼ばれた閑壘小屋の隣に、3千坪余の畑地を求めここに新しい家を建てた。

葉舟は妻文とともに林に囲まれたこの閑居な家に移り住み、この家を「ランブの家」と呼んだ。同月四女澄子が生まれた。

葉舟は自ら鋤鎌をとって農耕に従ったほか、地方の文学に寄与することに楽しみを見出していた。

印旛国語研究会で 研究・指導に当たる

小学校においては、印旛郡国語研究会が結成され、昭和五年春ごろ、葉舟は顧問となり、やがて『児童文学集』の昭和6年版が発行された。葉舟はこの綴方の研究・指導に当たり、後、講師としても協力に当たった。

昭和6年、葉舟は成田山新更会の機関紙『新更』の詩の選者になり、自ら

も小説や詩を同紙に発表した。

翌年7月、50歳になった葉舟は、行方沼東主宰の「登山の集まり」で、若い山好きの人たちのために赤城山の話をした。当時、会合の場所はいつも上町の金時ハーであった。ここに集まってきた7人の文学好きの青年、行方沼東、押尾孝、田中実、手島徹、山田清吉、小野幸、勝又担治らに葉舟命名で『七葉会』を結成させ、昭和9年12月には七葉会より回覧雑誌『さそり』を刊行する。

昭和11年12月、小品集『村の無名氏』を人文書院より刊行。

翌年6月、葉舟55歳のとき、「下総郷土談話会」を結成する。この下総郷土談話会は、吉倉の植物研究者で、郷土史にも詳しい甲田健之助を通じて知り合った仲間達によって結成された。会場は、田町の勝又担治宅であった。当時、甲田が植物やこの地方の民俗についての話をし、それを小川景子(さそり同人)が筆記した。会の開催は56回に及び昭和21年10月まで続けられた。それらの記録の中から『民間伝承』に掲載されたもの、また一部は『月明会』から出版されたりもした。

そんなときの葉舟は、偉ぶること、高ぶることなく若い人々とわけへだてなく接するおだやかな文人として親しまれていた。

高村光太郎も 駒井野に足を運ぶ

中央文壇に向けての作品の発刊も続けられた。昭和13年6月、『新綴り方読本』(春陽堂)、同15年9月歌集『滴瀝』(草木堂出版)、同17年7月『食べられる草木』(月明会)、同18年8月小品集『隣人』(今日の問題社)、同19年9月『明治文学の潮流』(紀元社)。

一方、この間中央からも生涯の親友であった高村光太郎をはじめ、柳田国男、折口信天、金田一京助、野尻抱影などの文人たちもしばしば駒井野の地に足を運んでいた。

昭和21年、葉舟は春ごろから著しく健康を書していたが、その間、歌集『滴瀝』の改版を計画し、6月増補して刊行する予定であった。しかし、その目的は果たせず、文学上の弟子でもあった幸町の医師川辺敏にみとられ、昭和22年2月2日逝去した。享年65歳。この歌集は同47年10月、古川書房から出版された。

同32年4月、三里塚記念公園内に葉舟の歌碑が建てられた。

我はもよ野にみそぎすとしもふさの
 あら牧に来て土を耕す 葉舟
 碑の裏面には、窪田空穂が葉舟の人となりとして文学界への貢献を記している。

(文中敬称略)